

[野菜部門]

4. 岡山県に近年導入されたイチゴ有望新品種の特性

[要約]

導入イチゴ品種「ゆめのか、おいCベリー、かおり野、こいのか」の岡山農研式高設栽培システムにおける花芽発育特性、収量、品質及び病害罹病性について明らかにした。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 野菜・花研究室

[連絡先] 電話086-955-0277

[分類] 情報

[背景・ねらい]

岡山県で主に栽培されている「さがほのか」等のイチゴ品種は炭疽病やうどんこ病に弱く、残暑により収穫始めの遅延が起こりやすいことから生産が不安定である。そこで、近年の主な導入品種の特性を「さがほのか」と比較して明らかにし、品種導入の資料とする。

[成果の内容・特徴]

1. 「ゆめのか」：花芽分化期が9日遅く、収穫開始期は22日遅い12月中旬頃。年内商品果収量は少ないが、全期商品果収量は同等。平均商品果重はやや重く、糖度は同程度であるが、酸含量がやや高く、果実硬度はやや硬い。炭疽病耐病性は中、うどんこ病耐病性はやや強である。各果房の頂果が先青果になりやすい（表1、2、3、図1）。
2. 「おいCベリー」：花芽分化期は2日遅く、収穫開始期は6日遅い11月下旬頃。年内商品果収量は同程度であるが、1から2月の商品果収量が少なく3から4月商品果収量が多いことから全期商品果収量はやや多い。平均商品果重はやや重く、糖度、酸含量及び果実硬度は高い。炭疽病耐病性はやや弱、うどんこ病耐病性はやや強である（表1、2、3、図1）。
3. 「かおり野」：花芽分化期が8日早く、収穫開始期は8日早い11月中旬頃。年内商品果収量及び全期商品果収量は多い。商品果平均果重はやや重く、糖度は同程度であるが、酸含量が少なく糖酸比が高い。果実硬度は同程度。炭疽病耐病性はやや強く、うどんこ病耐病性は中程度。不受精果の発生が多く、商品果率が低い。
4. 「こいのか」：花芽分化期及び収穫開始期は同程度。年内商品果収量はやや多いが、全期商品果収量はやや少ない。商品果平均果重はやや軽く、糖度及び酸含量が高い。果実硬度は同程度。炭疽病耐病性はやや弱、うどんこ病耐病性は弱。果実に白ろう果の発生が多い。

[成果の活用面・留意点]

1. 有望品種の導入には、育成者の許諾及び許諾を得た種苗業者から苗を購入する必要がある。

[具体的データ]

表1 花芽発育特性 (2011～2013年平均)

品種	花芽分化期 ^z	平均開花期 ^y	収穫始め ^x
ゆめのか	9/24 (+9) ^w	11/10 (+13)	12/16 (+22)
おいCベリー	9/17 (+2)	10/31 (+3)	11/30 (+6)
かおり野	9/7 (-8)	10/21 (-7)	11/16 (-8)
こいのか	9/14 (-1)	10/27 (-1)	11/28 (+4)
さがほのか (標準)	9/15 (0)	10/28 (0)	11/24 (0)

^z 肥厚中期

^y 頂花房頂果の開花を50%の株で確認した日

^x 各処理区で収穫を始めた日の平均

^w 標準品種からの差

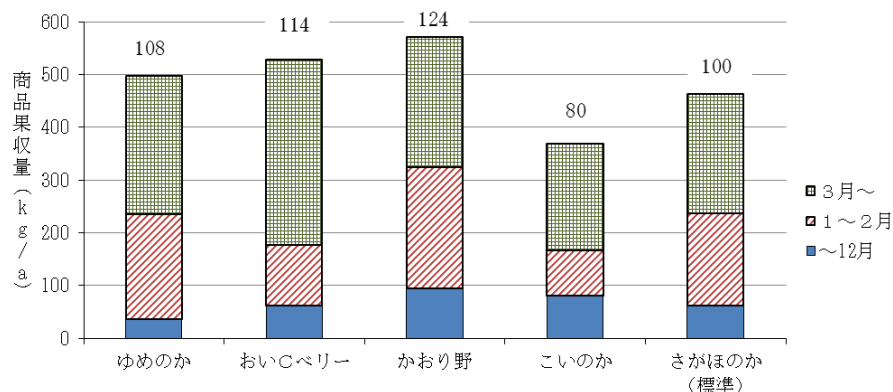


図1 商品果収量 (2011～2013年度平均)

表2 果実特性 (2011～2013年度平均)

品種	平均果重		Brix ^y (A)	クエン酸 含量 ^x (B)	糖酸比 (A/B)	果実 硬度 ^x N/3mm径	規格外果実 の主要内容
	全果 g	商品果 ^z g					
ゆめのか	16.1	19.2	11.0	0.66	16.8	1.65	先青果
おいCベリー	16.5	20.3	12.2	0.83	14.8	1.78	小果
かおり野	16.2	21.1	11.2	0.43	25.9	1.46	不受精果
こいのか	14.5	17.2	11.9	0.74	16.2	1.47	白ろう果
さがほのか (標準)	16.5	18.1	10.7	0.51	20.9	1.43	うどんこ病果

^z 6g以上の正常な果実

^y 12～4月平均

^x 1、4月平均

表3 炭疽病及びうどんこ病に対する耐病性程度

品種	耐病性判定	
	炭疽病 ^z	うどんこ病 ^y
ゆめのか	△	△～○
おいCベリー	×～△	△～○
かおり野	△～○	△
こいのか	×～△	×
さがほのか	△	×
さちのか	×	×
紅ほっぺ	×	×
宝交早生	○	—

^z 2013年度、2014年度の接種検定 (発病度) による判定

○強 (発病度0～30)、△中 (30～60)、×弱 (60～100)

^y 2011～2013年度の発病果率による判定

○強 (発病果率5%以下)、△中 (5～15%)、×弱 (15%以上)

[その他]

研究課題名：イチゴ優良導入品種の栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2011～2013年度

研究担当者：岡修一、綱島健司